2 近代遺跡の島・対馬
～対馬要塞跡を「野外博物館」へ～

小松 津代志
KOMATSU Tsuyoshi
郷土史家・砲台専門家

見晴らしの良い山や、海沿いの公園を歩けば島の至る所に旧弾薬庫や砲台の跡が見られる。これは、この島が防衛上いかに重要であったかを物語っている。では、これらの構造物はいつ、どのような目的で作られたのか？　その歴史的価値とは？

辺要の島・対馬の宿命と歴史

対馬（厳原）から福岡までの海路が138kmであるのに対し、韓国の釜山まではわずか約50kmである。九州本土と比較しても半分以下の近距離にあるこの島は、古来より大陸と日本の接点として極めて重要な位置を占めてきた。大陸側のロシア、朝鮮、中国といった諸国から日本列島を俯瞰すれば、北方から先島諸島まで鎖状に連なる島々は、太平洋へ進出するのを阻む「自然の城壁」のようにも見える。その中心に位置する対馬は、日本防衛ラインの最前線にして戦略的要衝であり、927年完成の『延喜式』において「辺要（辺境の要所）」と記されたその重要性は、現在においても何ら変わりはない。

図1　大陸から見た日本

対馬の国防の歴史を紐解けば、663年の白村江の戦いに伴う翌年の防人の配置を皮切りに、1019年の刀伊の入寇、元寇、応永の外寇、さらには秀吉の朝鮮出兵と、絶えず緊張の歴史を歩んできた。

近代になるとその役割は増し、日清・日露戦争から先の大戦にかけて浅茅湾（浅海湾）一帯をはじめとする全島に数多くの要塞（軍事遺産＝近代遺跡）が建設された。

沈黙する「近代遺跡」が語るもの

対馬要塞と呼ばれる砲台施設等は、明治中期から昭和の初期までに31カ所が造られた。島内の小高い山や岬の突端に点在し、青い空、蒼い海、そして深い緑の大地とともに静かに存在している。

戦前には軍機保護法や要塞地帯法などで厳しい制限を受けていたために、要塞の存在は秘密のベールに覆われていた。戦後の各砲台の火砲は、占領軍によって破壊または撤去された。加えて戦後の軍事アレルギーが蔓延し、国民からはすっかり見捨てられたのが実情であろう。

原剛監修の『日本の要塞』では「戦争で悲惨な思いしたからとか、軍事関係遺跡は戦争に繋がると言って、これを破壊してしまっては、後世の人が歴史を学ぶ教材を奪ってしまうことになってしまう。

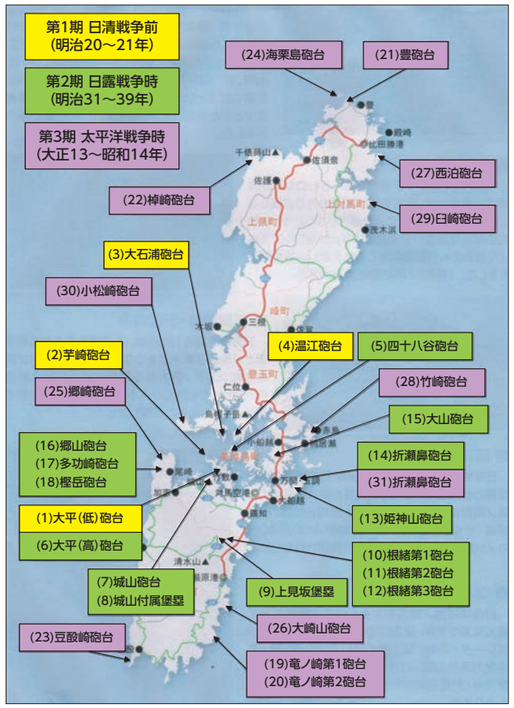

図2　対馬要塞配置図
（対馬観光物産協会編『対馬砲台あるき放題』引用）

軍事関係施設だから保存しないなどというのは、現代人の後世の人に対する僭越（せんえつ）な行為であり、横暴以外なにものでもない。」とし、さらに日本陸海軍についても「主観や感情に捉われることなく、冷静、客観的に学ばなければならない。現在残っている軍事関係遺跡（戦争遺跡＝軍事遺産）を保存し、歴史の教材にすることが大切である。」とされている。

私は、この原氏の意見・提言を素直に受け入れる者である。現実に戦争・軍を「負の遺産」と捉える考えはいまだに残っている。

この「近代遺跡」を客観的に判断し、評価し、保存活用し、次世代に繋げなければと思っている。

2024年8月16日付で文化庁が示した区分例によれば、「近代遺跡」とは幕末から太平洋戦争終結頃までの、我が国の近代化や近代史を象徴する遺跡（鉄道、港湾、軍事関係、官庁など）を指す。終戦から80年が経過した今日、戦争の記憶は「ヒト」から「モノ」へと移行しつつある。これらの遺跡は、自ら言葉を発することはないが、その存在そのものが歴史の背景や価値を雄弁に語る「正の遺産」である。

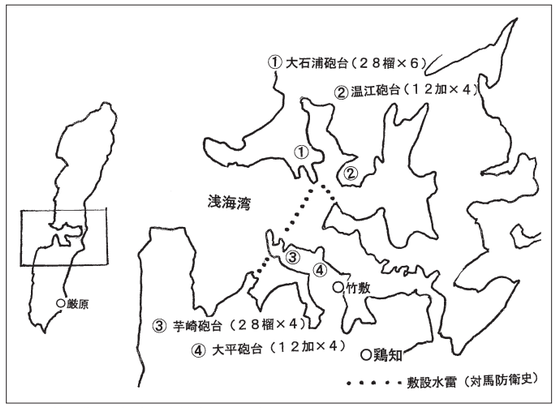

図3　第１期工事（日清戦争のため）

３期にわたる砲台建設とその特徴

近代の国際情勢において、日本は欧米諸国による激しい植民地獲得競争の脅威にさらされていた。その中で対馬に要塞が築かれる直接の契機となったのは、1884年の清仏戦争である。ロシアの巨文島租借に対し、イギリスが同島を占領したことが日本への直接の脅威となり、政府は1886年に対馬警備隊を新設。翌年から陸軍による砲台建設と、海軍による竹敷基地の整備が始まった。

対馬の砲台工事は、戦略的意義の変化に伴い3つの時期に分けることができる。第1期・第2期工事は、艦船の停泊地である浅茅湾を防御するための兵力配置であり、第3期は大陸との交通を援護する要点としての配備であった。

第１期工事（４カ所）

第1期工事は浅茅湾の南北岸にある「大石浦・温江」「芋崎・大平」の4カ所で始まった。当時の兵士や周辺住民は山道を切り拓き、大八車で巨石などの資材や備砲を運搬するという過酷な労働に従事した。暑さ寒さに負けず、ある時は迷信と戦い、ある時は栄養失調に倒れながら、わずか1年半という短期間で砂岩の浅茅石や赤レンガを積み上げ、強固な構造物を築き上げたのである。これらの設計は当時の西洋の技術と共通しており、特に耐弾性を重視した穹窿（きゅうりゅう）（アーチ形）構造の弾薬庫や、爆風を軽減するために互い違いに配置された入り口などにその特徴が見られる。

特に「芋崎砲台跡」は、東京湾要塞に次いで日本

写真1　芋崎・棲息掩蔽部

で2番目に着工された歴史を持ち、「築城の神様」と称された上原勇作工兵大尉（後の陸軍大臣）が指導した、極めて価値の高い遺跡である。地形を最大限に生かしたコンパクトな配置、弾薬庫や兵舎として利用された半地下式の棲息掩蔽部など、技術と意匠の両面で優れている。

また、冬の厳しい北西の風（アナジ）という気象条件や、島産の砂岩や花崗岩を用いた点など、地域性とも深く結びついており、近代土木構造物として高く評価されるべき遺跡である。

海軍の遺産と東洋一の規模を誇る砲台

日露戦争を背景とした第2期工事では、浅茅湾の東西を重視した配置へと移行し、標高150m以上の高地への設置や、コンクリートとレンガの混用が進んだ。この時期、海軍の竹敷は国内初の要港部へと昇格し、本部の竹敷と直結した万関運河の掘削や望楼の設置が行われた。土木学会が「近代土木遺産Aランク」に指定した竹敷要港部跡の石造施設群は、現在も海上自衛隊の岸壁やドックとして良好に保存されており、一大軍事拠点の面影を今に伝えている。

第２期工事（14カ所）の特徴

第1期工事とどう変わったか。①28cm榴弾砲台の砲座では、一砲座に一砲床が二砲床に。②新たに観測所を両翼に配置。また、③砲座と砲側庫が同一平面上に建設され、揚弾機が不要になる。④耐弾性の強度においては、砲側庫の奥側を球形にするとともに、砲側庫の盛土も今までの5mを50cm～1mに浅くして爆発力を封じ込めないようにしている。⑤砲座と棲息掩蔽部の関係においても敵弾からの被害を減少するため分離している。以上のように2期工事においては円滑な射撃指揮や耐弾性の向上を図る改良がされている。

第３期工事（13カ所）

昭和期の第3期工事では、全島が要塞化された。大正の軍縮により海軍から転用された「豊砲台」の40cm砲塔砲は、東洋一の規模を誇る地下巨大要塞である。

当時、この工事に従事した武末茂美氏の証言によれば、島中の石工・鍛冶屋をはじめ学生など200人ほどが総動員された。また、技能者である石工・鍛冶屋などは直径15mもの巨大な円柱形の穴をノミと金槌だけで掘り進める過酷な作業に汗を流したという。このように「ヒト」との関わりをもって要塞施設を捉える視点こそが、遺産としての価値をより深めるものとなる。

図4　第２期工事（日露戦争のため）

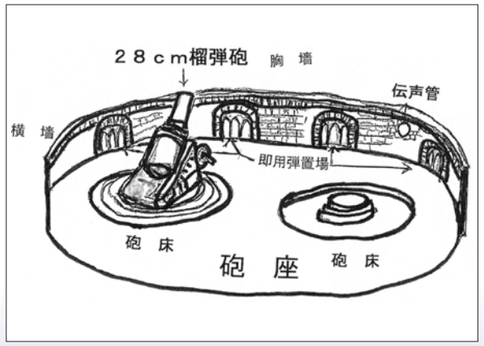

図5　榴弾砲台（学習研究社発行『日本の砲台』）

写真2　姫神山砲台

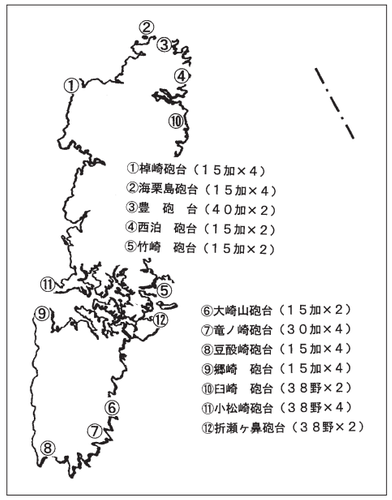

図6　第３期工事（先の大戦のため）

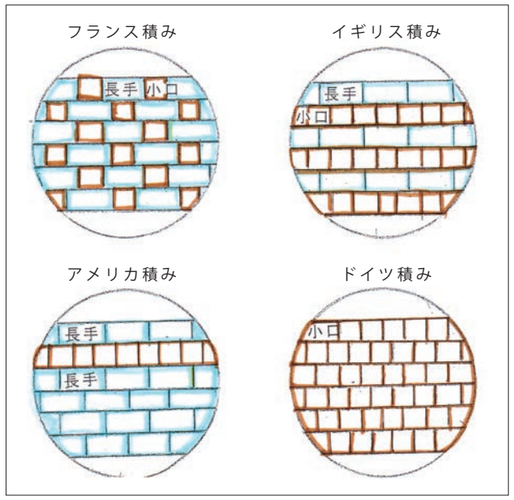

図7　要塞に見るレンガの積み方

砲塔砲台の特徴

30cm砲塔砲（龍ノ崎第1・2砲台）及び40cm砲塔砲（豊砲台）は、鉄筋コンクリート地下構造物で観測所2カ所。弾薬庫は洞窟式で2カ所。2m射光機は遠隔操作式で、照明座は隠顕式で岬の突端に設置され、近傍には発電所、繋船場がある。測遠機は88式電気式算定具を使用し、砲台入り口は偽装され、巨大な砲塔井が特徴である。

未来へ繋ぐ「野外博物館」としての展望

対馬要塞は、当時の他地域の砲台と比較しても極めて先進的な仕様を持っており、「永遠に対馬を守らなければいけない」という当時の政府の強い意志が反映されている。

原氏の近代遺跡を破壊するのではなく、教材として保存し、歴史に生かすべきという思いに加え、子や孫らの次世代に繋いでいくことを私は強調する。

上記の思いを発展させるためにも価値ある「対馬要塞跡」を「国史跡」への指定を切に願うものである。指定された後には「野外博物館」に整備することで、実際に見て、歩き、触れることができるうえに、歴史の事実を正確に伝達し、教訓を学ぶ平和教育の場となるだけでなく、観光資源として地域の振興にも大きく寄与するはずだ。対馬に眠る近代遺跡は、今を生きる我々に歴史の重みと教訓を問いかけ続けている。

<参考資料>
1）原剛『対馬防衛史』昭和58年11月　陸戦学会
2）陸軍築城本部編『現代本邦築城史』第2部集『対馬要塞築城史』附表第2ノ1
3）佐山二郎『大砲入門』1999年9月
4）由良富士夫『対馬は砲台の博物館』令和7年3月　講演資料
5）『日本の要塞』2003年10月　（株）学習研究社
6）『日本の近代土木遺産』土木学会　平成13年3月30日
7）十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』2002年6月10日
8）唐澤康彦『瀬戸内海の近代国防遺産』研究論文
9）拙著『辺要対馬壱岐防人史』平成13年3月　対馬警備隊
10）『對馬要塞重砲兵連隊史』平成7年　対馬要塞重砲兵連隊会